

米百俵物語

街角の交差点に立派な碑があった。近寄って見てみると「米百俵の碑」とあった。米百俵とは1898（明治31）年の戊辰戦争で敗れた長岡藩は、7万4000石から2万4000石に減知され財政は窮乏を極めその日の食に困るまでに至った。こうした窮状を見かねた支藩の三根山藩から米百俵が送られてきた。多くの藩士は飢えを凌ぐために少しでも生活が楽になるように考えた。

しかし藩の大参事・小林虎三郎はその米を藩士に分けることをせず、売却して学校設立の費用とする決定をした。藩士たちはこれで一息つけると喜んだのも束の間この決定に猛反発。小林虎三郎は「百俵の米も食べばたちまち無くなるが教育に充てれば明日の一万、百万俵となる」と論し政策を押し切る。この米百俵の売却金によって開校したのが洋学局、医学局を持つ「国漢学校」であった。

この国漢学校は現市立阪之上小学校に引き継がれ、「米百俵」の精神は長岡市の町づくりの指針や人材育成の理念となって今日に引き継がれている。更に文豪・山本有三が1943（昭和18）年に戯曲として書き下ろしたのが、「米百俵」であり新潮社から出版されている。

近年では小泉純一郎が内閣総理大臣になった直後の国会所信表明演説で「今の痛みに耐え明日をよくするために現在の日本に必要なのはこの米百俵精神だ」と。この引用が適格なのかどうかはわからない。しかしその精神は伝えていかねばならないと思う。 撮影 2013年春

